

2020（令和2）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

問一

体験談を語る人は、話の客観化に心を砕き、非真実を本当らしく語って体験の真実である自己の弱点を隠蔽し、さらにその弱点への囚われをも隠蔽したがつているということ。

- * まずは最低限のこととして、傍線部の主語を解答化する。「見抜かれたくない」の主語は、具体例にすぎない「自分は勇敢だと～人」ではなく、「体験談を語る人」である。
- * 解答要素として、第1～第3段落の「体験談」関連のキーワード群を適切に用いる。

問二

人間には共有の過敏な弱点があるので、他人を効果的に傷つけうる弱点を識別して非難したいのであれば、自分の過敏な弱点を相手の弱点として非難すればよいということ。

- * 「他人を有効に罵り（たければ）」をきちんと解答化する。「激しく非難するのに効果がある」などの解答では、「有効」を「効果」と言い換えているだけであり、不十分。「罵ったことで他人をうまく傷つけられる」という説明が必要である。
- * 「弱点があるのが共通」という意味ではない。弱点の種類には個人差があるから、ただ自分の弱点を並べ立てても、相手の弱点ではない場合には通用しないであろう。「共有の過敏な」弱点（粘膜）であるから、それを突かれると誰もが傷つくのである。

問三

人間が自身の弱点について作品を制作し鑑賞するのは、人間に共有の過敏な弱点への興味本位であるが、自己認識が甘く、他人へのあわれみは望みながら、それによってあわれな自己の直視を避けるのは、甚だしい背理だということ。

- * 「アウグスチヌスの議論」（例示）を「参考に」とされているが、「劇」への言及そのものではなく、それを参考として、「書き、読む」ことの矛盾について解答する。
- * 傍線部末の「いかに矛盾しているか」自体も解答表現として適切に置換するのを忘れないように（「甚だしい背理であるということ。」など）。

問四

人間の弱点を真実として暴露するリアリズムの小説は、実人生を形成する多彩な言葉の一部の抽象物であり、人生の無意味さを決定づけるだけで積極的意義がなかったから。

- * リアリズムの小説を、トルストイが「否定せざるをえなくなった」理由を本文から見出して解答する。まずは二つの「注」の内容が解答に必要である。さらに、「生の言葉の原野に較べれば、庭園のようなものであった」という比喻表現の解釈を述べる。「庭園」とは、単なる小さなものの比喻ではない。「生の原野」と対比して考察すること。

問五（文系専用問題）

大勢の人間が人生は意味を隠し持つと思いきり、それを明らかにする意思を捨てきれない。したがって、リアリズム小説の方法が否定されてからも、小説家に類する人々は、人生の外貌を形成する大きな要素である無数多彩な言葉に対し、真実を語る言葉を追求し続けると思われるから。

- * 「これからも」の指示内容は、単なる「今後も」にとどめず、「リアリズム小説が真実を語りえるという信念が失われてから後も」という意味の解答化をしておくこと。
- * 「言葉・言葉にいどむ」とは、「生の言葉の原野」「人生の外貌を形づくっている大きな要素である、人の口から出る言葉・言葉」「言葉の分厚い層の奥」「言葉の霧」などへの挑戦であり、「隠し持っている（と思われる）意味」＝「真実」を語ることへの「捨てきれない意思」である。そのようなことをもくろむ「或る種の人々」とは、かつての「リアリズム（の精神を持った）小説家」とは、もはや異なっているが、いわば「より高度のリアリズム精神を宿した後継の小説家的な人々」である。
- * ここで、「鍵になるのは、**体験談と告白という二つの観念の識別、把握の仕方**である」と言われていることを踏まえなければならない。「体験談」の求める「話の客観化」「事実性」ではなく、「告白 **Confessions**」（アウグスチヌスとトルストイが引かれるゆえんである）において「真実を語る」ことが意図されていることは明らかである。
- * 五行以上であれば、二文で書き、構文・表現のミスを避けたい。